Fr. M. クリンガー『双生児』点描

丸　山　三　友

Sturm und Drang はその終末を迎えて終るのではなく，それぞれの悲劇の第5幕の幕切れを以て終結する.[1] これはマッテンクロットが引用する，あの文芸運動にみられる特性の一面を捉えた興味ある指摘である．勿論これがあの運動に参加した劇作家のすべてに妥当するか否か，には大いに議論の余地は残るものの，ドイツ時代，ロシア時代を通じて，40年を超える長期に及んで意欲的な文学活動を継続した Friedrich Maximilian Klinger (1752-1831) の全創作期の中で，第1作 Otto (1774) から Stilpo und seine Kinder (1777) に至るまで只管劇作に熱中し，9篇の戯曲を矢継ぎ早に発表したあの第1期,[2] 即ちクリンガーの Sturm und Drang 時代の作品群にみられる，主題と形式における脈絡に乏しい変転と多様性とに着目すれば，そこには連続よりも非連続，一貫性よりも完結性が優先し，その意味でさきの指摘は，Sturm und Drang の劇作家の中にあってはクリンガーに最も適切なものといえよう．そこで，本稿ではこのような解釈を踏まえて，第3の戯曲 Die Zwillinge. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen. (1775) を対象に選び，その構造また内容からして，これが最も強い独自性を有する作品であることをあらためて検証し総括し，さらには後年のクリンガーにとってこの戯曲が唯一格別の存在であり，彼の Sturm und Drang の記念碑的な所産となったことを最後に確認しておきたい．

I. Preisausschreiben der Ackermann-Schröderschen Truppe

周知のようにハンブルクのアッカーマン・シュレーダー劇団が，1775年2月28日付の告知で20ルイスドールの賞金を付けて3乃至5幕の悲劇或いは喜劇の新作を公募し，またそれに応じた J. A. Leisewitz (1752-

1806)の兄弟相克の悲劇 Julius von Tarent の一部を当時親交のあった J. M. Miller (1750-1814) から教えられたことが，クリンガーの Die Zwillinge 創作の契機であった．

この事実と関連して，この作品で先ず挙げられることは構造上の特色であり，その外形を決定ずけたものは劇団が提示した募集の条件であった．これはまた当時の劇場の実際をも窺わせる興味深い内容でもあるので引用しておくと „... daß das Stück von der Beschaffenheit sey, daß es a) in Ansehung seines sittlichen Inhalts auf die Bühne gebracht werden dürfe; daß es auch b) um aufs Theater gebracht zu werden, keine ausserordentliche grosse Kosten an ungewöhnlichen Kleidertrachten, und sonstigen Dekorationen erfordere; ferner c) nicht die Anzahl der agirenden Personen übersteige, die man billiger Weise auf einer deutschen Bühne erwarten kann. d) Ob wir gleich Trauerspiele in Versen nicht ganz ausschliessen, so werden uns gleichwohl die in Prose, von sonst gleicher Güte, viel lieber seyn.“[3] と極めて具体的実際的な要求である．

これら公募の諸条件に従って，クリンガーは „ganz regelmäßiges Stück fürs Theater“ を創作したとミラーはフランクフルトのクリンガーの友人 P. Chr. Kayser(1755-1824)に伝えているが，[4] 応募に際して劇団の条件を遵守すべきRegelと見做し，専らそれを尊重したであろう彼の執筆の開始は7月末と推定され，完成稿は11月中旬ゲーテを通してハンブルクに送られたという．応募作品の選衡に当った Fr. L. Schröder(1744-1816)の判定理由は後記するが，それによってクリンガーの悲劇がライゼヴィッツの作品と他1作とに優先し，受賞作として1776年2月23日ハンブルク劇場で初演された．

騎士劇 Otto，ついで J. M. R. Lenz(1751-1792)の Der Hofmeister (1774)を意識しての第2作，市民悲劇 Das leidende Weib(1775)，或いはこの75年当時まだその一部を創作中であったPyrrhusなどの戯曲にみられる登場人物の多数，プロットの多様性，また頻繁な場面転換 —— これはクリンガーに限らず Sturm und Drang 全般を通じての傾向であるが —— 等の手法と比較して，クリンガーの第3作のもつ構造は全体的に

みて極端なまでに簡潔であり，またプロットの展開にも極めて乏しい．テヴェレ河の辺，貴族の館を舞台に；双生児の兄弟 Guelfo と Ferdinando，両親の Alter Guelfo と Amalia，Guelfo の親友 Grimaldi と Ferdinando の婚約者 Gräfin Kamilla，主たる登場人物はこの戯曲の構成に必要な最少限の6人に限定され，また場面の転換は館の中の Saal と Zimmer の二カ所のみである．恰も擬古典主義の作品を思わせるとまで評される，整然としたこの構造上の特色は，クリンガーが先ず，如何に自作の外形を劇場側の要望に適合させるべく，積極的な努力を拂ったかを窺わせるが，またそれと同時に，緻密な計算に基づいて独自の構築物の形成を可能にした，クリンガーの劇作家としての手腕の確かさをも示したことになる．ここで，この兄弟殺害の悲劇を概観する前に，構成上の要点をいくつかさきに挙げておくと，先ず，5幕21場から成るこの戯曲では，その2/3即ち14場を主人公たるゲルフォーが占め，Ⅰ－Ⅲ幕の第1場には常に，彼とグリマルディーとの対話が設定されている．次に，戯曲の80％にあたるⅢ幕までのプロットの進行は外的なそれよりも，専らゲルフォーの内面の進展に集中され，彼の情熱の直線的な昂揚の経路と悲劇の緊張とが完全に一致し，Ⅲ幕の終りを頂点として，フェルディナンドー殺害のあとのゲルフォーは一気に弛緩し変容し，それと共に劇は緊迫した場面を展開させながら，急速に終結に向かう．また，舞台におけるゲルフォー像があまりにも突出して，全く相反的な性格をもつフェルディナンドーは彼の憎悪の対象としてのみ存在し，その登場も僅かⅡ幕の2．3．6．の3場にすぎず，両者互角に闘争する他作のような兄弟相克の悲劇とは大きく趣を異にする．さらにまたゲルフォーとの関連に於て不可欠の存在としてのグリマルディーは劇中に占める位置をゲルフォーと二分する．

以上略述したように，クリンガーの Die Zwillinge はまずハンブルクの劇団の条件に基づいて必要最小限の簡素な外的構造を基盤にしながら，その上に構築されたものは，力点の配分が示す特異ともいえる内的構成を有する作品である．以下この構成の実体を順を追って検出しながら，この兄弟相克の悲劇の実態と本質を明らかにする．

Ⅱ. „Erstgeburt und Kamilla“

I. 1. Zimmer. グリマルディーが宮廷で優遇されるフェルディナンドーと，ゲルフォーの愛するカミラとの結婚を話題にして，ゲルフォーを刺激する．それに対し，*Guelfo.* ... mein Bruder reitet auf dem Adler über mich hinaus. Aber herunterreissen will ich ihn, will ihn im stolzen Schwung haschen, und niederschmettern![5] とまずは対抗の決意を示し，さらにフェルディナンドーと自らとの不当な差別を憤る ... Wenn ich seine Titel hinschreibe, schmier ich einen Bogen voll. Schreib ich mich gegen über, heißts－Ritter Guelfo, mit einem Einkommen von 500 Ducaten. ... Nicht so viel Land ist mein, als ich mit meinem Degen übermessen kann. Und warum denn nun? Grimaldi, warum hab' ich nichts, und er alles? ...[6] グリマルディーはピアノに向かい，強弱のメロディを交えてゲルフォーの心を操り，また自らの挫折した生を語り，それを齊した者への復讐を口にする．*Grimaldi.* Guelfo, Dir fehlt nichts, als Glauben an Dich, und Du bist ein gemachter Mann, der alles mit Gewalt nach sich zieht. Sieh, ich bin ein zusammengedrückter, gewürgter Wurm, der sich kaum aufwenden kann ... Für mich ist Natur und Leben todt, weil man mir den Sinn dafür unfreundlich tödtete. In meinem Leben möcht' ich mich an Einem rächen, mich dann in mein Kissen hüllen, und mit Wollust sterben. ... Der traurige Mantel der Melancholie hat sich um mich geschlungen, ich will weinen. ...[7] グリマルディーは無力とメランコリーに包まれた自身をゲルフォーに晒し，それによって衰えた生に対する嫌悪感を彼に抱かせる．このグリマルディーなる人物，以後次第に明らかになるように，彼はゲルフォーの情熱を知り尽した上で，時には同情し，勇気付け，不正に対する怒りを掻きたて，復讐の実行へ追いつめる，巧妙でまた最も危険な煽動者である．*2.* 出産を介助した宮廷医に双生児のいずれが長子か，求める答の得られぬまま，苛立つゲルフォーをグリマルディーは鏡の前に導き，*Gri.* Dieser Blick! dieses Wesen! diese sich ausbreitende Menschenbeugende Gluth im schwarzen, grossen, rollenden Auge!－Guelfo! Du bist für ein Königreich geboren.[8] と偉大を

称え，さらに兄弟の関係まで否定してみせる．*Gri.* Guelfo! Du bist Ferdinandos Bruder nicht. Ha! Wie kamst Du unter das Geschlecht dieser Schwachen? Du bist vertauscht! O Du bist so nicht geboren! Sieh Dich an, königlicher Guelfo!... *G.* Hörtest Du den Doctor? Man wußte nicht, welcher es wäre, weil man nicht wissen wollte! weil seine heuchlerische, sanfte Miene schon damals der Aeltern Herz an sich bannte![9] ゲルフォーの疑惑は次第に確信に変じ，長子の身分，両親その他すべてを掠め取ったフェルディナンドーにその返還を要求する．*G.* Herausgeben sollst du mir die Erstgeburt, herausgeben sollst du mir Vater und Mutter, herausgeben sollst du mir alles ; oder ich will dich würgen, wie Kain, und verflucht, den Mord auf der Stirne, herumirren.[10] 兄弟殺害の原初の寓話であるカインに自らを重ねるが，長子権の略取に関るのであれば，ゲルフォーが演ずるのはむしろエサウであろう．フェルディナンドーとの兄弟の関係を疑わせたグリマルディーは，ゲルフォーの昂る怒りを助長して，さらに父子のそれまでも否定する．*Gri.* Du bist des alten Gelfos Sohn nicht. Du bist ausser dem Bette gezeugt. Hat er einen Zug, ein Fäserchen am Leibe, wie Du? Guelfo![11] *3.-5.* 頑な息子に縋るように家族の愛を訴えるアマーリアの姿は，固定的な役割に拘束されるこの劇の人物像の中では唯一自然であり，クリンガーの初期作品に時としてみられる写実的手法の成果のひとつがここにも認められる．ゲルフォーもまたこの母に対してのみ，遂には甘えにも似た恨みを語り，束の間の和らぎを示す．ゲルフォーとの宥和を求める老ゲルフォーは，その直後に届くゲルフォーの小作人に対する暴行の報告に忽ちにして激怒する．名を同じくするこの父子は，激昂し易い気質も共有していることになる．この幕の終り，ゲルフォーの短かなモノロークには，両親の愛と祝福，家督とカミラ，すべてをフェルディナンドーに奪われる無念の思いが繰り返され，とりわけカミラへの断ち難い愛着が生々しい．

以上Ⅰ幕の一部を拾って，ゲルフォー家の家族の関係に悲劇に至る危険性の存在をみたが，併せてここに明記しておきたいのは，長子権の問題を悲劇の根幹として，双生児を登場させ，しかもいずれが真の長子であるかを最後まで不分明のままに終らせる，この二点にクリンガーは劇作

家として非凡の手腕を示したことである．シュレーダーもライゼヴィッツの応募作に対するクリンガー劇の作為上の優越をそこに認めて，„... bis ihm (Julius) das dritte (Trauerspiel) : Die Zwillinge, denselben (Preis) dadurch abgewann, daß es die mächtige gewaltige Triebfeder der unentschieden gebliebenen Erstgeburt voraus hatte. ‚Wer beweist mir, daß nicht ich der Erstgeborene von uns Zwillingen war?' Das entflammt den wilden hintennach gesetzten Guelfo, und darüber fallen sie beyde."[12] これが公募の受賞作として Die Zwillinge が掲載された1776年7月の „Hamburgisches Theater. 1. Band" の序文に記すシュレーダーの，応募3作に対する判定理由であった．

II. 1. Saal. カミラを伴ったフェルディナンドーの帰館に心を奪われるゲルフォーを相手に，グリマルディーはひとり語りのように，ユリエッテとの愛によって再び精神の高揚に恵まれながら，フェルディナンドーに反対され，傷心のあまり世を去ったユリエッテへの愛に献身する自身のいまを語り続ける．*Gri.* ... und da sie starb, starb Grimaldi! Alle Hoffnung und Leben entquoll meinem Herzen mit den blutigen Thränen. Bruder! Dir darf ichs sagen, daß mir jede Nacht ihre blasse Todtengestalt erscheint, daß ich sie so kalt in meine Arme festdrücke, daß sie mir winkt, und daß sie mich nach sich zieht. O Juliette! Juliette![13] フェルディナンドーによってユリエッテを失ったグリマルディーは，いまや彼によってカミラの愛を奪われたゲルフォーの嫉妬を煽り始める．ゲルフォーも *G.*— Ich kann Dich versichern, ich allein kann das Weib an ihr finden, das an ihr ist, das Weib des tapferen Ritters, dem sie Siegskronen mit Liebe windet, kömmt er vom Feinde. Ihm ist sie nichts....[14] と対抗するが，*Gri.* Und das Weib hat er? *G.* Und das Weib hat er![15] I 幕では長子の問題を，この幕ではカミラを持ち出してグリマルディーはゲルフォーを刺戟し挑発する．*2.* カミラと共に両親に迎えられるフェルディナンドー．再会を喜ぶ家族のこの劇中唯一の幸福と活気に満ちたシーンである．姿を見せぬゲルフォーの様子を問うフェルディナンドーに父は嘆き，*Alter Guelfo.* ... Ich seh' ihn manchmal in einem Monat nicht, den wilden Guelfo. Ferdinando, er wird immer unbändiger, stolzer. Rach-

gierig ist er; stößt mich und seine Mutter ins Grab im blinden Zorn.... また彼とは不離不分の存在であるグリマルディーの危険性を指摘する. *A.G.* ... Ich wollt', er hing dem Grimaldi nicht so an, der macht ihn traurig dazu mit seiner Melancholie; das verdirbt ihn völlig. Grimaldi ist ein düstrer Mensch, der Nachts im Feld läuft, bey Sturm und Wind, und zu den Sternen ruft. Der Kirchhof soll sein liebster Aufenthalt seyn ... Das ist Guelfos Gesellschaft.[16] 老ゲルフォーは一方を wild, 他方を düster とそれぞれの実態の表面を捉えて, 後者が前者に及ぼす悪影響を憂えているが, この両者を, 共に求めて現実には得られぬものに病的なまでに執着する, 人間の相反する表裏二面の形象と理解すれば, 同じく根底にメランコリーを共有することから, 彼等もまた一組の兄弟, いや劇中ではむしろ一対の双生児的関係にあるとの解釈も可能でる. *3.-4.* 始めてカミラに接したグリマルディーはその優美を賛えるが, 次の場のモノロークではまたユリエッテへの切実な想いを語り, 最後にフェルディナンドーへの復讐を断言する. *5.-6.* ひとり部屋に残るカミラにゲルフォーは愛を訴え唇を奪うが, 現われたフェルディナンドーは, そのくちづけを兄弟の愛のしるしとしてゲルフォーの挑発をかわし, 逆に翌朝の遠駆けに彼を誘う.

III. 1. Sturm und Nacht. ゲルフォーの内面の推移と劇の進行とは完全に一致する, と先に記したがその意味で, この嵐の夜のⅢ幕が悲劇全体の頂点を形成している. 暗い部屋, 明かりを手に現れたゲルフォー. 夜の闇にひそむ悪霊に挑むように, *G.* Ha! verfolgt mich alles? Alle Dämonen und alle Gespenster der Nacht? Mein böser Geist hängt mir auf dem Nacken, er läßt mich nicht, stirrt mich aus allen Winkeln an. Blas' zu! Vergift' mir jedes Fäserchen meines Herzens! Wühl' giftig in meinem Blut! ... Die Glocke ruft dumpf, der Sturm saußt über der Tiber. Eine schöne Nacht! — Ferdinando, gib das Weib! Ferdinando, gib die Erstgeburt! ...[17] 暗い怨念にとり憑かれた自身を識りながら, 要求は一貫して変わらない. 傍らのソファーに眠るグリマルディーに気付いて揺り起こし, 既に自身とは不可分の存在, 分身である筈の彼に自らとの一致を求めるように, *G.* ... Grimaldi! ich muß! ich muß! Das Schicksal sprach

aus, ich muß! ... Entschluß ist da, Vollbringen ist da! ... Ich muß! — Grimaldi! wenn ich nicht müßte — Im Sturme sausen böse Geister : Guelfo, du mußt! —[18] と決意を語る．これは，この夜相続契約書を盗み見て，すべてがフェルディナンドーに，自身には年俸500ドゥカーテンが与えられるのみ，を確認し，また激昂した老ゲルフォーに槍で打ちのめされた瞬間に，彼を父ではないと断定したことに由る決心であると，ゲルフォーはグリマルディーに打ち明ける．劇全体を通じて最も力点がおかれたこの場では，ゲルフォーの決意をさらに揺ぎないものにするかのように，グリマルディーも極めて多辨になり，ゲルフォーに加えられた不正を怒り憎悪を露にして，*Gri.* Menschheit! Menschheit! Eine feindliche Hand schüttelte den Loostopf, die Stimme schrie drein : Verflucht fall' es auf die beyden! So fiels auf uns, ausgeleert mit Haß. Wir beyde sind vernichtet, ohne Rettung und Trost. In diesem Augenblick überfällt mich Menschenhaß ... Laß uns die Menschen anfallen, wenn das Aeltern thun! Laß sie uns zerreissen! ... Ha! ich werd' wahnsinnig mit Dir über das Geschick. ゲルフォーもこれに呼応して，*G.* Mord! Mord! und wenn ichs denke, stehn mir die Haare nicht. と強気になるが，しかしまた何かに怯え，Grimaldi! rette mich vor meinem Geist! Rette, rette mich! ... Horch, hörst Du nicht Trauermusik? Hörst Du kein Leichengeheul? Grimaldi! Ha! nichts? nichts? Hörst Du nicht Wehklagen? Ha![19] ゲルフォーに与えた効果に醉ったように，グリマルディーは続けて，優しい友，すべての不幸を癒してくれるものとしての死を賛美してみせるが，ゲルフォーは復讐を遂げた後の死こそ二重の幸福と応じ，さきのグリマルディーの多辨に対抗し，長広舌を揮って自身の復讐を正当化する．次はその一部であるが，*G.* ... Und wenn ich denk', Grimaldi, was das Leben ist; wie einer, der eine vermögende Seele hat, tief bey der Erde liegt, und ein andrer mit einem schwachen, eitlen, schmeichlerischen Geist über ihn hinaus schreitet und hoch sitzt! Ich bin nur Guelfo ... Und er ist auf dem Weg, mit den mir gestohlnen Gütern, mit der mir gestohlnen Braut, Herzog zu werden ; und ich bin auf dem Weg, ein Narr zu werden über alles das! Aber abdringen will ich sie ihm! er soll sie hergeben,

oder sein Leben![20] フェルディナンドーへの羨望と憎悪を根底にして，自身と彼に下された家族の不当な決定に対する怒りと反抗は益々強固なものになり，長子権とカミラ引渡しの要求はいまや一切が無か，全く選択の余地のない危険な心の情況の中へゲルフォーは自らを追い込んでいく．*2.-3.* ゲルフォーを案じて深夜部屋を訪れ，一途に息子の魂の平安と愛情を哀願するアマーリアに，ゲルフォーは苦しみから逃れるべく，いずれが長子か最後の答を強制する．*G.* Nun Mutter, sag' mir!—sag' mir!—*Amalia*. Dein Auge rollt fürchterlich ... Guelfo, berge mich vor Deinem Blick! *G.* Schau mich an, Guelfos Weib! Mach denn meiner Quaal auf Einmal ein Ende! Antwort' mir treu! *A.* Wenn ich Dir helfen könnte!—Eil! eil! zögre nicht! — Was stockst Du? Eil doch! *G.* Weib, wer von Deinen Söhnen ist der Erstgeborne? ... Antwort' auf diese Frage, Mutter! Ich laß' Dich nicht weg, und erliegst Du unter der Angst! Wer ist der Erstgeborne von Deinen Söhnen? *A.* Ferdinando. *G.* Mutter! Auch Du willst Guelfo durch Lügen betrügen? ... Mutter, wer von uns beyden ist der Erstgeborne? *A.* Erbarm Dich mein! Erbarm Dich unser aller, schrecklicher Würger! *G.* Belügst Du Deinen Guelfo? *A.* Bey der Angst, die je eine Mutter wegen ihres Kindes erlitten! ich lüge nicht. *G.* Ferdinando wärs? *A.* Ferdinando ists! ... *G.* Nun, Mutter! Woran erkennet Ihr, daß Ferdinando der Erstgeborne ist. *A.* Ich weiß nicht — Dein Vater sagts. Als ich zu mir kam, hielt ich Euch beyde, und vergaß alles. ...[21] 双生児の出生に際して，フェルディナンドー長子，ゲルフォー次子の決定は自然の秩序ではなく，父ゲルフォーの意志によって下されたことを，追求の果てに母から引き出したゲルフォーは，この家族が自らに強制した不正の秩序に対する復讐の為に，憎悪するフェルディナンドー殺害を遂に決断する．家族との最後の絆であった母の去ったあと，*G. (allein)* — Mutter! Mutter! Mutter! ... Eine wunderbare noch nie gefühlte Empfindung durchdringt mich. Ha! noch einmal hat ihre Liebe mein Herz weich gemacht ... Gute Nacht, Mutter! — (*nach der Thür*) Hörst Du? Gute Nacht! Gott erhalt' Dich! geb' Dir, was ich nicht habe — gute Nacht! keine mehr für mich auf dieser Erde, vielleicht keine mehr für

Dich! — Grimaldi! — Schlaf, Trauriger! ... Du verläßt mich, alles verläßt mich! ... Auch Kamilla trauert! Weh mir! o weh mir! — Ferdinando! ... die Erstgeburt und Kamilla! — Wenn Du sie nicht giebst — (*sieht durchs Fenster*) Ha! die blutigen Strahlen durch die Nacht! die erschrecklichen Gespenster! das Heulen und Gesaus! ...[22] 自らに最後の断を下したこの場のゲルフォーのモノロークには，外に吹き荒れる嵐とは逆に，もはや激しさは消え，疑惑に苦しみ憎悪に駆られて，宿命的に決定的な行動に至るしかない人間の静かな諦念の趣さえも看取される．

ゲルフォーと長子権

以上Ⅲ幕まで要約して，„Erstgeburt und Kamilla“ を要求するゲルフォーの姿勢は昂りながら終始一貫するが，既に明らかなようにこの悲劇の根本テーマは，封建的絶対的な父権支配の貴族世界における，家族の秩序の絶対的な権利である長子権の問題である．老ゲルフォーが求める家族の秩序は，既存の秩序として通用し，確固たるものであることが要求される．そこでの長子権には，それに基づき長子が家督相続とそれにつながる所領，富の一切を獲得し，他はすべてを失う絶対的な不平等が存在する．母を追求して，一切の自然権に背く，父の恣意による長子権の剥奪を確信したゲルフォーは，それに基づく家族の秩序に屈従する必要は全く認めず，また家族とのすべての和解，妥協を拒否し，不当な家族の秩序に対する憎悪に燃え，それに対して反逆する．しかし，ゲルフォーの憎悪の矛先は，家族の長として秩序を維持する父には向けられず，両親の愛情を独占して長子権を詐取し，また愛するカミラを奪ったとするフェルディナンドーに向けられ，その返還を要求する．これは言わば，作意による対象の転換であり，Die Zwillinge は題名が示す兄弟相克の様相を一面には呈しながら，既述のようにこの作品は，貴族社会の不公正な権利秩序のはらむ矛盾不当の問題性と，それに運命を決定された個人の悲劇であり，ここにみられるクリンガーの努力の中心は，この問題性が生み出した状況を克明に刻印することに向けられている．

マルティーニはこの家族の不正の体制を敷衍して，老ゲルフォーの支配する絶対的な家族体制の下では，自然な愛情，道徳的な関係と雖も家族の秩序の維持に反する場合は，不正としてその存在は許されない．こ

の言わば非人間的な体制は，しかしまたそれ自体が不正となる,[23] と指摘する．ゲルフォーが真っ向から対決したのがこの不正の体制であり，それに対して無制約に自我を主張する権利を保持し，それを実行しようとする．不正の秩序に対する個我の絶対的な自己主張とその自滅という構図で捉えれば，これもまた典型的な Sturm und Drang の悲劇のひとつ，と理解されよう．但し，ゲルフォーの形姿に就て付言しておくと，自らの運命を決定した長子権の剥奪に対して家族に反逆し，復讐の手段としての兄弟殺害に至るまでの内面の経路を辿れば，自身の破滅と引替えに家族を崩壊させる決意を抱くに至るまで，寧ろ彼は駆り立てられ，追い詰められて，その絶対的な制約，束縛から逃れるために家族を破壊する弱く受動的な性格をより強く示している．従って彼は Sturm und Drang のあの勇敢で積極的な主人公，所謂 Tat- und Kraftmensch とはなり得ず，またあまりにも一方的に強烈な自己主張を貫こうとしたゲルフォーは，Sturm und Drang が愛した der große Kerl のひとりとも言い難い．兄弟殺害に至るまでの直進的な昂揚に比して，復讐の目的を果した後の次のⅣ幕でのゲルフォーには異様な人格の弛緩が認識される．

グリマルディーとゲルフォー

固定的な役割を与えられたこの劇の登場人物の中で，最も興味を惹く存在はグリマルディーである．ゲルフォーとの関連で触れたように，この悲劇では不可欠の人物であり，劇の展開を決定ずけているものは，誘導する者とされる者としてのグリマルディーとゲルフォーとの対決である．この両者の関係にさきにも触れたが，マッテンクロットもこの両者に題名の示す双生児の本来を該当させ,[24] マルティーニはグリマルディーをゲルフォーの二重像，対照像として，ゲルフォーを際立てる存在であるとする.[25] マッテンクロットはまた，Sturm und Drang 文学に内在するメランコリーに焦点を定めて，その特性を把握しているが，この作品での対象はゲルフォーと，就中グリマルディーである．グリマルディーのメランコリーは一切の営為の可能性を失った受動的な閉塞状態を彼の現実としている．ゲルフォーは現在と未来の状況に拘束され，グリマルディーは過去に捕われいる．彼にとって現実たり得るものは，それが彼の過去に繋がるもののみであり，彼の一切の不幸は既に過去に形成さ

れている.[26] 現在の幸福とは，過去のそれ，かつて経験した華やかな日日，就中ユリエッテとの愛に自らを拘束し，只管それに忠実であり続けようとすることにある．このメランコリーの頑強さ，硬直した感覚，さらには絶対的独善的な態度はまたゲルフォーにも共通である．マッテンクロットはさらにグリマルディー像に付言して，彼には頽廃した自我と，それを第三者の如く客観的に観察する態度がみられ，その間隙に自己の悲哀を快楽とする自虐的な一面が認められるとするが,[27] 反之，すべてを奪い去られたゲルフォーの現実との対決は自己に忠実であろうとする限り，悲哀は憎悪を益々増幅させる強固な基盤を固めさせるのみである．このゲルフォーに対して煽動者としての機能を与えられるグリマルディーは，既に触れたように，自らの無力，憂愁，悲哀をゲルフォーに浸透させ，それによって彼は勇気付き，さらなる憎悪を掻きたる．テキストの引用を両者の対話の場面に重点をおいてきたが，それらで明らかなように，グリマルディーはゲルフォーの心を実に巧妙に操り，自らの目的へ誘導していく．*I. 1.* で早くもゲルフォーの心の底に起爆装置を組み込んだグリマルディーは，以後の対話の各場面でその危険な機械を作動させ続けるのである．表現を替えてグリマルディーの機能に付て今ひとつ付加すると，彼はこの Die Zwillinge なるひとつの人形劇に登場する一個の人形としてその役割を果すと同時に，ゲルフォーを，いやこの悲劇全体を操る巧みな操り手としての機能を有する，二層構造的な存在であるといえる．劇中，演技者にとっては恐らく最も魅力的であろうこの登場人物を，ハンブルクでの上演に際して演じたのは，応募作の銓衡者であり，劇団随一の俳優として知られたシュレーダーであった．

Ⅲ．Guelfo - Kain

IV. 1.-3. 劇全体の 8 割を占め，しかもプロットの展開に乏しい始めの 3 幕に対し，残る 2 幕は一変して劇的効果に富んだ場面を連続させながら，急速なテンポによってこの悲劇を終結させる．翌朝，ゲルフォーと遠駆けに出たまま戻らぬフェルディナンドーに不安を募らせながら，カミラとアマーリアは結婚式の衣装を選ぶ．そのさなか異様な気配に，*A.* Horch!— Ha! kömmt jemand? *Kamilla.* Erschrecken Sie mich nicht

—— *A.* Mich deucht, es käme jemand geschlichen nahe zu mir. *K.* Ich hör so oft meinen Namen mit banger Stimme rufen.[28] 現れた老ゲルフォーも，昨夜の嵐にフェルディナンドーの愛した庭木が裂かれ，また修道院の弔いの鐘を聞いた者があると話し，ゲルフォー家におきる不幸を恐れる．姿の見えぬゲルフォーを求めてグリマルディーが眠り過ごした自身を呪い，また最良の息子を突き放したと老ゲルフォーを非難する．そこへ，鞍に血のつくフェルディナンドーの乗馬が，続いてゲルフォーが疾駆して戻ってくる．*4.* カミラとアマーリアにフェルディナンドーの所在を追求されたゲルフォーは反抗的に，神に問われたカインの言葉を自身におきかえて投げ返す．*G.* Hi! hi! was weiß ich! Bin ich Hüter Deines Bräutigams, schönes Mädchen? Bin ich Hüter Deines Sohns?[29] 二人の去ったあと，*G.* (*allein, nach einigem Schweigen*) Wo bin ich? (*kömmt vor den Spiegel*) Rächer! Rächer mit flammendem Schwerdt! Hast du eingegraben auf meine Stirne den Mord? hast du ausgesprochen über mich, daß die Himmel zitterten : Unstät und flüchtig![30] —— Hast du's? den Fluch noch nicht?[31] ゲルフォーはカインと同じ兄弟殺しの罪に怯え，下される審判を恐れる．額に印はなくとも鏡の中の自像を正視するに耐えられない．*G.* —— Ha! ich kann mich nicht ansehen! Reiß dich aus dir, Guelfo! (*zerschlägt den Spiegel*) zerschlage dich, Guelfo! —— Guelfo! Guelfo! geh aus dir! ...[32] 同じ鏡でグリマルディーが称えた姿は虚像であり，行為のあとの自らの実像をゲルフォーはその中に見たことになる．この始めて知る殺人者の悍しく，厭わしい姿を，鏡を打ち砕くことによってゲルフォー自身が否定する．復讐を遂げ目的を果したゲルフォーは，いまは漸く与えられる筈の安息，即ち眠りを求める．*G.* —— Jetzt will ich schlafen! O jetzt will ich sanft schlafen! Ferdinando ließ mich lange nicht schlafen ... Ich will schlafen, Blutiger! und wenn tausend brennende Dolche durch meine Seele gingen. Gute Nacht, Guelfo! hi! hi! gute Nacht, Guelfo![33] *5.* しかし，その眠りをここではグリマルディーが妨げる．*G.* Was störst Du mich im Schlaf? Weg! ich will den Schlaf herzaubern. Ich muß, muß schlafen. Hinaus![34] この眠りに関してであるが，一方が眠り他方がそれを妨げる行為は，*III. 1.* とこの *IV. 5.* では両者全く相反し，

その後に現れる様相もそれぞれ互いに相反的であるといえる．決定的な行為の前には，只管復讐を求めたゲルフォーが，今はただ眠りを必要とするのに対し，グリマルディーの姿は復讐の煽動者から，兄弟殺害の事実を問い質す者へと，次第に微妙に変貌する．*Gri.* Du hast den Bruder ermordet? *G.* Den Feind! (*stößt nach ihm*) den Dieb der Erstgeburt![35] フェルディナンドーの絶命の様を克明に語り，彼の非業の死を悲しみ，下手人を呪うであろう家族には傲然と反発すると語る中に，ふとゲルフォーはグリマルディーに怪しい変化を感じ，*G.*... Grimaldi! Was faßt Du mich an so hart?... Du hältst mich immer fester —— Deine Hand wird immer feuriger ——[36] グリマルディーの中にフェルディナンドーの存在を悟り，Hast Du den Bund mit ihm gemacht? Ist sein Geist in Dich gefahren?... Bist Du nicht Grimaldi, der mir gut war?[37] この幕の始め，姿なき姿で母に忍び寄り，声なき声でカミラに死を告げたフェルディナンドーが，ここではグリマルディーの姿を借りて，始めてゲルフォーに挑みかかる，ということであろう．

V. 1.-2. 次子による長子の殺害を，その屍の前で弾劾する父に対し，*G.* Er hat mir die Erstgeburt gestohlen, hat mich verdorben und Ihr! Er hat mir diese gestohlen, die bleich da liegt. Ich erschlug ihn, da er mir das Meinige nicht geben wollte. 彼にすべてを奪われたが故にと答え，... Rächer! Rächer! —— Ich hab' ausgeredt. (*verhüllt sich.*)[38] もはやすべてを語り尽したとして，自身を抛棄した姿勢を示す．家族の長として秩序を維持する父ゲルフォーは，アベルを失ったアダムとして，もはや無言無抵抗のゲルフォー・カインを自らの手で裁く．*A. G.* Ich stehe da, wie Adam, als ihm der Gerechte erschlagen ward. Eva heult, die Braut klagt, Kain flucht den Alten... Soll er irren, doppelt verdammt, unstätt und flüchtig?... Der Blutige ruft Rache! —— Rächen will ich Vater Guelfos Sohn! erretten von der Schande Guelfos Sohn! leben im Jammer verwaist —— (*stößt ihn nieder.*)[39]

この悲劇に相応しい幕切れ，必然的な終結である．ゲルフォー・アダムはゲルフォー・カインに対して神の代理を勤めるが，これは父としての彼に残された最後の愛の行為であり，ゲルフォーを我が手に掛けるこ

とによって，フェルディナンドーの殺害者に復讐し，同時にまた，神がカインに与えた，„unstet und flüchtig“ 地にさまようさすらい人たる罰の苦しみと汚辱からゲルフォーを救うのである．最後の姿勢が示すように，ゲルフォーも父に内在するこの裁き手，復讐者としての権威を承認している．しかし，彼がすべてを賭けて反逆した封建的な貴族社会の権利秩序がはらむ矛盾の問題を，家族の長としてその秩序の維持を絶対視する老ゲルフォーは最後まで理解していない．このような父に対する死の前の沈黙，復讐する父に対して，verhüllt sich 両手で顔を覆うというゼスチュアに至って，ゲルフォーの悲劇性は始めて完全に充足されたとみる．これに就てのマッテンクロットの解釈によれば，自らを呪縛し続けた悲哀と，それに発端する激情とから最後まで脱却し切れなかったゲルフォーのこの姿には，その外皮の下に最後の反抗と，さらに穏やかな悟りの二重性が刻印されており，無制約の自己主張と現実の道徳原理の正当性との和合が彼の良心の中に成立して，犯した罪過の代償として，自身を提供する最後の自己主張が斯様な形で示される，という.[40] しかし，例えばヒュイッセンなどは，メランコリーを主題とする心理学的な見地からのマッテンクロットの解釈と，マルティーニの社会批判的なそれとを，Die Zwillinge 或いは Sturm und Drang 運動の理解に対するすぐれた貢献として，時には両者を比較してみせるが,[41] ゲルフォーの最後のゼスチュアの，無制約の自我の主張と道徳秩序の最終的な一致和合という後者に重点のおかれた把握は，やはり60年代の研究の限界を示すものといえるのではないか．ゲルフォーの Sich Verhüllen をさらに積極的に解釈すれば，彼は死の場面に於て漸く自らを操る人形遣いの糸を断ち切り，自らの最後は自らで選ぶ，即ちそれは自決の意思表示であり，もはや役割は終えたが，死に至るまで一貫して変らぬ，不正の秩序に対する彼の断固たる反抗の姿と捉えたい．マルティーニは兄弟相克を好んでテーマとする Sturm und Drang の悲劇の動機を，封建的秩序の中にのみ限定せず，体制の根本である家族の構成そのものにも，それを求めることを提起しているが，この悲劇の終末に就て彼の意見をさらに敷衍していえば，家族にある総体的客観的な権威が，それを構成するひとりの無法な自己主張者に屈従を強制し，その生命を犠牲として提供せざるを得なくさせ

たのである．

Ⅳ．Prospektentwurf zur Ankündigung der Gesammelten Werke in 12 Bänden

Die Zwillinge は既述のように公募の入選作として1776年２月ハンブルクで上演され，また同年７月，„Hamburgisches Theater. 1. Band“ の巻頭に掲載された．シュレーダーの受賞理由を述べた序文がこの第１巻に添えられ，さきにその一部を紹介したが，Sturm und Drangの所産の中で同時代人から非難と称賛，これ程極端に評価の分れた劇作品は他にはなかったとされている．例えば前者の代表として屢々引合いに出されるG. A. Bürger(1747-1794)などは „...Es ist kein einziger natürlicher Character drinn. Der Guelfo ist eine Bestie, die ich mit Wolgefallen für einen tollen Hund todtschießen sehen könnte. Von Lisboa bis zum kalten Oby, wie Ramler singt, ist außer dem Tollhause kein solcher Character ...Kurz, bleibt mir mit den Zwillingen vom Leibe!...“[42] グリマルディーなどは劇中不要の人物と酷評するビュルガーの，ゲルフォー像への反撥も全く手厳しい．これに対しまた例えば，Neuer gelehrter Mercurius auf das Jahr 1776, Bd. 4. にみられる劇評は，„Das erste Stück in diesem Bande ist ein Trauerspiel des Herrn Klinger, die Zwillinge. Nach unserem Urtheil eins der vorzüglichsten Produkte, die jemalen auf deutschem Boden gewachsen sind. Wir haben auch einiges daran auszusetzen ... vielleicht ist es ein wenig zu lang, vielleicht spricht und schreyt Guelfo ein wenig zu viel : — aber, wenn wir uns der Wirkung erinnern, welche die Vorstellung auf alle Zuschauer ... gethan hat, so vergisst man alle Critik, und wird versucht, in Lobsprüche auszubrechen, denen der Leser nicht glaubt, weil er sie nicht mit dem Gefühle lesen kan, womit sie niedergeschrieben wurden. Wem das Stück im Lesen gefällt, der komme nach Hamburg und sehe es ; denn auf welchem Theater sonst ist der *Brokmann*, der den Guelfo, und der *Schröder*, der den Grimaldi machen könte? ...“[43] とこの作品の演劇効果に高い評価を与えている．活字を通して劇作品に接した批判者と，その

舞台を目の当りにした劇評家との，それぞれが受ける印象の根本的な相違が，例に挙げたこの両者から読み取れるが，この差違はその体質からして Sturm und Drang 劇に於て最も顕著であろう．なお後者の劇評からは，ハンブルク劇場でのこの悲劇の上演から，内容の激しさに強い感動を受けた K. Ph. Moritz の „Anton Reiser“（1785-90）の主人公と軌を一にする作品への共感が汲みとれる．

ではクリンガー自身は Die Zwillinge をどのように評価していたか．それに就ては1780年のロシア移住後のクリンガーが示したこの作品と，移住前のすべての劇作品に対する扱いにみられる著しい懸隔が明確な解答を与えている．即ち，移住後のクリンガーは，„F. M. Klingers Theater“ (1786-87. 4 Teile. Riga), „F. M. Klingers Neues Theater“ (1790. 2 Teile. Leipzig), „Auswahl aus F. M. Klingers dramatischen Werken“ (1794. 2 Bände. Leipzig) と三度に及んで自らの劇作品集を出版し，さらに最後に自選の作品集 „F. M. Klingers Gesammelte Werke in 12 Bänden“（1809-1815. Königsberg）を刊行しているが，恰も駆り立てられたかのような劇作集中の時代，即ちクリンガーの Sturm und Drang 期の所産から，これらの作品集，さらにこの „Gesammelte Werke“ に収められたのは，実に Die Zwillinge のみであった．

1985年 6 月資料蒐集に訪れたフランクフルトの Freies Deutsches Hochstift. Frankfurter Goethe-Museum が所蔵するクリンガーの手稿から，友人カイザー宛の1773年 8 月23日付の書簡を本誌32号で始めて公表したが，同時に閲覧した手稿の中に，この „Werke“ の公刊を企図したクリンガーが，ケーニッヒスベルクの出版業者 G. H. L. Nicolovius（1767-1839）に宛てた1803年11月13日付の書信と，それに添えた収録予定の作品目録の草案があり，これもコピーして持ち帰ったので，適切な参考資料として写真版でこの稿末に掲載しておきたい．これで明白なように，1809年から順次刊行されたこの12巻本の作品集に於ても，Die Zwilling ; Trauerspiel. が青年期の唯一の所産として，第 1 巻の巻頭を飾っている．但し成立年の1774は „Theater“ 以来の，後年のクリンガーの記憶の誤りで正しくは1775年．成立年代順の列記から，以下の収録作品はすべてロシア時代の産物である．

ドイツ時代の終りの既に早い時期に，自身の Sturm und Drang に訣別の態度をとったクリンガーが，後年の作品集には唯一 Die Zwillinge を採択した事実のみでなく，彼が示したこの劇作品に限っての格別の愛着を物語る事柄にも触れておかなければならない．先ずそれは，さきに挙げた„Theater“(1786-87)出版の為に，初版即ち „Hamburgisches Theater. 1. Band“(1776)に掲載された稿体に，文法，正書法，句読点などに関る自身特有の傾向を修正すべく積極的な努力を拂ったことである．次に，„Auswahl“(1794)には Die Zwillinge を，その全体にわたって広く加筆修整を加えられ，より説明的に，より穏やかに大きく変貌した改作版として登場させていることである．因みに，本稿で使用した Historisch-kritische Gesamtausgabe. Bd. II にはこの „Auswahl“ 版と初版が見開き2頁で対照されているが，改作に施された表現の変更，分量の増加は比較して実に著しい．さらにまた „Werke“ の Die Zwillinge (1809) は再び初版に最も近い稿体に戻されるなど，長い創作活動の殆んど全般を通じて，クリンガーはこの劇作品に関与し努力を傾けていたのであった．次いで，掲載の作品目録に戻っていまひとつ見逃してならないことは，第2巻の終りの，1792年の改作版に拠るとする，Die Zwillinge, Trauerspiel の存在である．1792年の改作が „Auswahl“ 版の原型であるが，クリンガーはさらにこの改作版から新しく生まれた三度目の修整版 Die Zwillinge をここに記載していたことになる．たしかに，この作品目録はニコロヴィウスに提示された，収録予定の作品に関する原案の域にとどまるものと解しても，しかし，これまで知られなかった斯様な手稿の存在によって，同一作品の初版の他に，およそ30年後の最終稿体のそれまでもが一覧表に加えられていたことが明らかとなり，この事実からしても，過去の所産のどれにもまして，クリンガーはこの戯曲に対して愛着，いや執着をさえ抱いていたといえよう．

クリンガーの Sturm und Drang もそれぞれの悲劇の幕切れを以て終結していた筈が，この作品のみは唯一その例外であり，„Werke“ 第1巻出版の前後，1809年6月のニコロヴィウス宛の書簡にクリンガーが回顧しているように，Die Zwillinge こそ „Werk der Jugendkraft, wahrer Ausdruck der Leidenschaft“ [44] であったのであり，自身の Sturm und Drang

期の劇作の理念を余すところなく表現し得た会心の作として，またあの時代の産物の唯一輝かしい記念碑として，ながくクリンガーの中に意義を保ち続けたのであった.

注

1 Mattenklott. Melancholie in der Dramatik des Sturm und Drang. S. 46

2 Hering. Fr. M. Klinger. S. 26 Nach Hering ; Erste Periode (1774-1777), intensive Tätigkeit als Dramatiker. Zweite Periode (1777-1780), ein Schwanken zwischen Dramen und Epen.

3 Fr. M. Klingers dramatische Jugendwerke. 1. Band. S. 351

4 Miller an Kayser, 24. September 1775. Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Band II. S. X - XI

5 Fr. M. Klinger. Werke. Gesamtausgabe. Bd. II. S. 16

6 ibid. S. 16

7 ibid. S. 20-22

8 ibid. S. 30

9 ibid. S. 30-32

10 ibid. S. 32

11 ibid. S. 34

12 Fr. M. Klingers dramatische Jugendwerke. 1. Band. S. 353

13 Klinger. Werke. Gesamtausgabe. Bd. II. S. 68

14 ibid. S. 70

15 ibid. S. 72

16 ibid. S. 84-86

17 ibid. S. 122

18 ibid. S. 126

19 ibid. S. 134

20 ibid. S. 138

21 ibid. S. 152-156

22 ibid. S. 160

23 Martini. Die feindlichen Brüder. JDSG. 16. S.236

24 Mattenklott. S. 64

25 Martini. S. 231

26 Mattenklott. S. 72

27 ibid. S. 71

28 Klinger. Werke. Gesamtausgabe. Bd. II. S. 166

29 ibid. S. 178 1. Mose. 4. 9. Da sprach der Herr zu Kain : Wo ist dein Bruder Abel? Er sprach : Ich weiß nicht ; soll ich meines Bruders Hüter sein?

30-33 ibid. S. 180 1. Mose. 4. 12. Unstet und flüchtig sollst du sein auf Erden.
34 ibid. S. 182
35-37 ibid. S. 186
38 ibid. S. 198-204
39 ibid. S. 206
40 Mattenklott. S. 84-85
41 Huyssen. S. 194
42 Klinger. Werke. Gesamtausgabe. Bd. II. S. XXVI
43 ibid. S. XXIV
44 Klinger an Nicolovius. 8. Juny 1809. Rieger, Briefbuch zu Klinger in seiner Reife. S. 127

テキスト

Friedrich Maximilian Klingers dramatische Jugendwerke. Erster Band. Hrsg. v. H. Berendt u. K. Wolff. Leipzig. 1912
Friedrich Maximilian Klinger. Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe. Band II. Die Zwillinge. Hrsg. v. E. P. Harris u.a. Tübingen. 1997
Die Heilige Schrift des Alten- und Neuen Testaments. Nach dem 1912 vom Ausschuß d. EKD genehmigten Text. Stuttgart.

参考文献

M. Rieger. Klinger in seiner Reife. Briefbuch. Darmstadt. 1896
Chr. Hering. Friedrich Maximilian Klinger. Der Weltmann als Dichter. Berlin. 1966
G. Mattenklott. Melancholie in der Dramatik des Sturm und Drang. Stuttgart. 1968
Fr. Martini. Die feindlichen Brüder. Im Jahrbuch d. dt. Schillergesellschaft. 16. Jahrgang. Stuttgart. 1972
A. Huyssen. Drama des Sturm und Drang. München. 1980
D. Bader (Hrsg.). Kain und Abel ——. München. Zürich. 1983
M. Wacker (Hrsg.). Sturm und Drang. Darmstadt. 1985
W. Hinck (Hrsg.). Sturm und Drang. 2. Aufl. Frankfurt. 1989

Über die Merkmale im Klinger-Drama ≫Die Zwillinge≪

Mitsutomo MARUYAMA

Der Sturm und Drang findet nicht erst am Ende der Epoche, sondern bereits im fünften Akt jedes seiner Trauerspiele ein Ende. Diese Auffassung trifft auf Fr. M. Klinger (1752-1831) sehr zu, der mit seinen rasch erscheinenden Jugendwerken, vom Erstling ≫Otto≪ (1774) bis zum ≫Stilpo≪ (1777), eine intensive Tätigkeit als Dramatiker entfaltete, sich bald darauf jedoch zu der ersten Periode seines Schaffens auf Distanz hielt. Klinger schätzte aber sein drittes Drama: ≫Die Zwillinge. Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen.≪ (1775) viel höher als seine übrigen Jugenddramen; d.h. das Trauerspiel blieb ihm noch länger in den Jahren in Rußland Gegenstand seiner dichterischen Beschäftigung, er bemühte sich mehrmals um Bearbeitungen der ≫Zwillinge≪ zwecks Veröffentlichungen.

Die Ackermann-Schrödersche Truppe in Hamburg verkündete ein Preisausschreiben für ein gutes „Originalstück" im Februar 1775, und das den Bedingungen des Preisverleihers entsprechende Werk ≫Die Zwillinge≪ erhielt den Preis. In der Urteilsbegründung Fr. L. Schröders heißt es: „...bis ihm (Leisewitzens ≫Julius von Tarent≪) das dritte (Trauerspiel) : Die Zwillinge, denselben (Preis) dadurch abgewann, daß es die mächtige gewaltige Triebfeder der unentschieden gebliebenen Erstgeburt voraus hatte. ‚Wer beweist mir, daß nicht ich der Erstgeborene von uns Zwillingen war?' Das entflammt den wilden hintennach gesetzten Guelfo, und darüber fallen sie beyde." Klinger ließ die Brüder als Zwillinge auftreten und stellte damit die Problematik der feudalen Rechtsordnung der adligen Familie in die Mitte.

Guelfo beherrscht 2/3 aller — insgesamt 21 — Szenen des Stücks, Ferdinando tritt aber nur in 3 Szenen auf. In diesem Trauerspiel gibt es

also keinen Bruderkonflikt im eigentlichen Sinne. Alles Tragische geschieht und entwickelt sich im Innern des leidenschaftlichen grimmigen Helden Guelfo. Er haßt glühend seinen Bruder, der ihn um die Erstgeburt, die Liebe der Eltern und die geliebte Kamilla betrogen habe, er trotzt wütend der Rechtsordnung der Familie, die nicht im natürlichen Gesetz, sondern im eigenwilligen Entscheiden des Vaters begründet sei. Guelfo entschließt sich, von Haß und Trotz gejagt, zum Brudermord, um das Unrecht der Familienordnung zu rächen. Er zerstört somit die ganze Familie und sich selbst.

Der Lauf der dramatischen Handlung ist mit dem inneren Vorgang Guelfos vereint. Grimaldi, sein Busenfreund und ein düsterer Melancholiker, spielt dabei eine entscheidende Rolle. Er zeigt ihm bald Mitgefühl für seine Erniedrigung, bald reizt er seinen Zorn über das Unrecht, und leitet ihn, so schlau aufhetzend, an zur Rache. Grimaldi ist ein geschickter Marionettenspieler und führt seine Puppe Guelfo, der Erstgeburtsrecht und Kamilla immer wieder zurückfordert, zur Mordtat. Guelfo spielt nach der Tat einen umgestellten Kain, er widersteht dem Vater, der den Brudermord ahndet, und verbirgt sich schließlich vor ihm. Guelfos letzte Geste, das Sich-Verhüllen, hat zweierlei Bedeutung. Es ist einerseits Selbstmord, andererseits sein bis zum Ende nicht gebeugter Protest gegen die unrechte Familienordnung.

Klinger veröffentlichte nach der Auswanderung nach Rußland viermal seine eigenen Werke; „F. M. Klingers Theater" (1786-87), „Neues Theater" (1790), „Auswahl der dramatischen Werke" (1794) und „Gesammelte Werke in 12 Bänden" (1809-15). Er nahm in diesen Ausgaben nur ≫Die Zwillinge≪ als einziges Werk aus seinen deutschen Frühdramen auf. Unter den Handschriften Klingers, die das Freie Deutsche Hochstift zu Frankfurt besitzt, findet sich ein Prospektentwurf zur Ankündigung seiner Gesammelten Werke, den er einem Brief an den Königsberger Verleger G. H. L. Nicolovius (13. Nov. 1803) beilegte. Der Entwurf zeigt uns die merkwürdige Tatsache, daß der Verfasser neben dem

Anfangsstück des 1. Bandes noch einmal dasselbe Stück in der letzten Fassung zu Ende des 2. Bandes hinzufügte. Auch Klinger machte schon früh mit seinem Sturm und Drang ein Ende, doch das Jugenddrama, ≫Die Zwillinge≪, wofür er so eine Vorliebe hatte, war und blieb ihm lebenslang das „Werk der Jugendkraft, wahrer Ausdruck der Leidenschaft“ (8. Juny 1809 an Nicolovius).